

はじめに

本学の日本語教育センターは2011年4月に設置された。「留学生10万人計画」の時代を超え、「留学生30万人計画」「グローバル人材育成」という語が席卷している現在にあって、新しく生まれた本学の日本語教育センターはどのような役割を担うのか。本センターの起点として、大学による留学生の受け入れが留学生自身そして日本人学生にとってどのような意義があるのか、また大学の日本語教育の意義と役割とはどのようなものなのかを、学内外の日本語教育専門家、本学の国際戦略の視点などから複眼的に議論し、本学の日本語教育に関わる方々と共有することが必要である。

そこで、本センター設置1周年を記念するとともに、本学における日本語教育の方向づけを行う機会として、2012年12月4日に「大学における日本語教育の意義と可能性」と題するシンポジウムを開催した。本報告書は、その内容を収録したものである。

シンポジウムは2部構成で、第1部の講演は、西原鈴子先生（国際交流基金日本語国際センター所長）に「大学の国際化と日本語教育」という題目でお話いただいた。つづいて第2部のパネルディスカッションは、本学の国際戦略の立場から、そして学内および学外の日本語教育専門家の立場から「立教大学の国際化と日本語教育」についての期待と課題を提示していただいた後、登壇者とフロアとの質疑応答によるディスカッションを行った。

第1部で、国内外の日本語教育の指導者的存在である西原先生には、「大学の国際化と日本語教育」というテーマでご講演いただいた。初めに、世界の動向と日本の施策を概観し、大学の世界展開力の強化のために「大学の国際化」が喫緊の課題となっていることが示され、それとともに、少子高齢化にともなう学生人口の変化という日本社会の将来に向けても「大学の国際化」が必要であることが指摘された。その上で、「大学の国際化」が社会からの要請であるだけでなく、キャンパスにいる学生にも良い影響があることについても説明された。具体的には、多様な価値観に触れる機会に触れ、行動パターンの類型を知り、「判断保留」を学ぶ中から、留学生と日本人学生がともに多文化社会における人間関係を強化するために必要な力、すなわち総合的關係調整能力が開発されることが示された。そして、留学生を受け入れるキャンパスにおいて必要な日本語教育が学術目標達成のためのアカデミック・ジャパニーズであるとともに、留学生も生活者で

あることから生活者のための日本語の視点、日本社会で生活し、グローバル人材として将来のために社会人のための日本語の視点も必要であることが指摘された。

第2部のパネルディスカッションでは、初めに総長室調査役、グローバル人材育成センター開設準備室長、経営学部教授の山口先生から「大学の国際戦略と日本語教育」というテーマでお話しいただいた。まず、本学が目指す国際化が「多文化・多言語能力のグローバル市民の育成を目指す」ものであることが示された。次に、日本語未習の留学生を、学位取得を目的とするプログラムの正規生として受け入れる実践が、立教で始まっていることが紹介され、大学のグローバル化にあたっては、国際水準の教育を行うことが必要であると同時に、質の高い高等教育が、日本語を教授言語として行われてきたということの意味を大切にすることがあること、また立教で学ぶ意義を考えていく必要がある意味からも、教育環境を整える条件の一つとして日本語未習者に対する日本語教育の整備が重要であるという見解が示された。最後に、今後大学として、日本語教育を充実させ留学生を受け入れやすい仕組みづくりを、国際化推進本部で検討するという方向が示された。

次に、国際センター長、法学部教授の松田先生から「立教大学における国際教育交流の現状」というテーマでお話しいただいた。まず、国際センターの重要な業務の一つとして、協定校との交換方式による、立教の学生の海外への送り出しと海外からの留学生の受け入れがあること、またこの交換留学が現在積極的に展開されていることが報告された。次に、地域や海外協定校の特色によって、立教に送りだしてくる学生の日本語レベルが様々であることが具体的に示され、この観点から、日本語教育センターが9レベルの日本語教育を展開していることが、多様な地域、特色をもつ大学にとって立教大学への送り出しの魅力の一つとなっていること、また立教の学生の留学先としての協定校に広がりを持たせることに貢献しうることという見解が示された。最後に、今後、数週間レベルの超短期留学プログラムの開発を日本語教育センターとともに進めていくという展望が示された。

3番目のパネリストで、筑波大学名誉教授の石田先生には、「国際理解のための日本語教育」というテーマでお話しいただいた。まず「国際理解」の定義が示され、日本語教育の効率性が習得に必要な学習時間の観点から説明された。次に石田氏ご自身の経験をもとに、日本語教育の効率のよさは、学習者の視点に立った日本語分析などの研究が基礎にあるからであるという見解が示された。さらに、

言語が文化と一体であることから、国際化のために英語のみで教育を行うのがいいという議論は慎重に行うべきであるという指摘がなされるとともに、日本語を使える外国人を増やすという積極的な方策の必要性和、それによって日本人が直接外国人と接する、また外国人に日本を理解してもらうということの重要性、そしてそれを実現するための日本語教育の重要性が論じられた。

4番目のパネリストで、前日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部長の池田先生には、「日本の高等教育機関で日本語教育を行う意義」というテーマでお話いただいた。ここでは、立教大学の国際化を推進する上で、日本語教育センターがどのような役割を担えるかという観点から、「連携」「研究」「発信」の3つの機能が提言された。まず、各学部、学科が必要とする特色ある日本語教育を提供するために学部・学科との連携をするという展望が示され、立教の独自性を生かした日本語教育の実現のための研究の必要性和、成果の発信による国際貢献の可能性についての示唆が与えられた。

その後、5名のお話を踏まえて、フロアの参加者とのディスカッションが行われた。各登壇者の講演内容とその後のディスカッションの詳細は、本報告書をお読みいただきたい。

今回のシンポジウムは、日本語教育センターとして初めてのシンポジウムであった。学内の教職員をはじめ、学生、学外の方々、約70名の方々とともに、本学の日本語教育のこれからの方向性を考えることができたことに感謝したい。

最後に、今回のシンポジウム開催にあたってご登壇いただいた西原鈴子先生、石田敏子先生、山口和範先生、松田宏一郎先生、池田伸子先生に厚くお礼申し上げます。また、企画・準備段階から本報告書をまとめるまでご尽力くださった日本語教育センター、そして国際センターの皆様にご心からお礼申し上げます。

日本語教育センター長／異文化コミュニケーション学部教授

丸山 千歌